

巻頭言

技術の式年遷宮

Shikinenn Sengu, 'vicennial rebuilding' of technology

執行役員
開発本部長

岩本 祐一
Yuuichi Iwamoto



少し古い話になりますが、2013年に伊勢神宮の第62回神宮式年遷宮が有りました。ご存知とは思いますが、内宮と外宮の2つの正殿及び14の別宮の社殿を20年ごとに全て建て替えて神座を遷す、1300年間ずっと繰り返されている大プロジェクトです。

同じものを20年ごとに作り直すことは昔々に最高峰に達した伝統工芸・伝統技術の伝承になりますが、技術革新の止まった別の世界の出来事と考えていました。しかし、以下の様なコメントを聞いて考えを改めました。

- ・「同じに見えますが、一から考えて新しく作った最良のものです。」

今あるものをコピーしカット アンド ペーストして同じ様に作るのではなく、20年間の進歩を織り込んでゼロから最良のものを作り上げる。かたくなに伝統を守るのではなく、伝統技術も新しい技術も勉強し取り入れ、常にその時々最高の技量を集めて織り込む。

- ・「20年ごとに遷宮があるので、一生で2回の機会が巡ってくる。」

20年ごとにプロジェクトがあると、「20代の下働きで学び、40代で棟梁として腕をふるう」、「30代の中堅で参加して、50代に後見としてアドバイスと育成をする」、いろんな立場で2回は参加して自分の技術の向上と次世代への伝承が出来る。一番大変なのは、新たに建てるプロジェクトの経験が消えてなくなること。

木造の社殿建築は、適切にメンテナンスされると数百年の寿命と言われていました。式年遷宮は、メンテナンスして長く使うこともできるのに敢えて最新の技術の粋を集めて建て直し、技術・技量の向上と伝承に努めるためのプロジェクトとも理解できます。

「20年に1度」、「全くゼロから作り直す」、「最新と伝統の融合した最高」、「プロジェクトを通じた向上と伝承」は、コマツの技術開発にも活用できるキーワードと考えます。

経験の積み重ねが重要な重圧長大の製品や技術は、改善と小変更を続けて育ててゆきます。そして生まれて20年ほど経つと、競争力もあり、不具合も出なくなり、コストも下がってきて、言わば至宝のコア技術になります。しかしそこで満足しないで、敢えて「20年に1度」は「全くゼロから作り直す」必要があります。なぜなら、ゼロからの開発の経験者と初体験者が一緒に七転八倒してPDCAを回すことで、将来に渡って「最新と伝統の融合した最高」の技術であり続けるためと、ゼロから開発する為の人や物や知見や経験を「プロジェクトを通じた向上と伝承」するためです。

情報化建機の様に従来に無い新しい技術の開発と並行して、エンジン、油圧機器、動力伝達機構、電子制御と言ったコマツの商品を支える既存のコア技術も、20年に1度は「式年遷宮」を繰り返して行きたいと考えます。